

三河アララギ

平成二十五年

十月号

第六十卷 第十号



ニューヨーク日記(84) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

August 9, 2013 : San Sebastián Pintxos

Blue Shoe Diaries



夏休み!ってことにしてスペイン、バスク地方のサンセバスティアンにピンチョスを食べに来ちゃいました! 沢山あるピンチョスバーを地元の人達みたいに梯子。あそこのバーはトルティーヤが美味しい、あっちはコロッケって言った感じ。バーに入るとお皿をわたされて自分で好きなピンチョスを取る仕組みになってるの。入るたびにワイン一杯って感じだからお腹がいっぱいになったころは大分酔っぱらってるかも?

Vacation! A foodie vacation means that I'm in the Basque region of Spain in San Sebastián (aka Donostia in Basque) eating away at the many pintxos bars. You're given a plate when at the bar and you just pick which pintxos you want yourself. Drink some wine. Hop on over to the next pintxos bar, and keep repeating until you're satisfied... or too tipsy to move on. Fun! and oh so yummy!!

目次

第六十卷第十号(通卷七一八号)

表紙	アーティチョーク
ニューヨーク日記(84)	
感銘歌 御津磯夫第十歌集	
歌集「スモン」	
赤蜻蛉	
西瓜	
女三代	
初秋	
聴覚	
仕来り	
山家の夕暮れ	
白色	
今の今	
菜園	
瀬音	
おもかげ	
百日紅	
変わらない	
日本蒲公英	
文月の雨	
絵画	
送り火	
ミソハギ	
玉虫	
ペンシルバニア	
この夏の変	
背表紙	
天龍峽	
太陽	

今泉	由利	(1)
Blue Shoe		(2)
大須賀寿恵		(4)
岡本八千代		(5)
今泉	由利	(6)
弓谷	久子	(7)
青木	玉枝	(8)
佐藤	喜仙	(9)
内藤	志げ	(10)
林	伊佐子	(11)
安藤	和代	(12)
伊藤	忠男	(13)
清澤	範子	(14)
鈴木	孝雄	(15)
足立	晴代	(16)
胃甲	節子	(17)
富岡	和子	(18)
半田	うめ子	(19)
近藤	映子	(20)
伊与田	広子	(21)
杉浦	恵美子	(22)
平松	裕子	(23)
小野	可南子	(24)
山口	千恵子	(25)
夏目	勝弘	(26)
秋山	逸穂	(27)
白井	信昭	(28)
阿部	淑子	(29)

わが心をば

『ことよせ』

『俳句』

『かさね』九月号

私の一首

「歴代天皇御製歌」(十六)

贈呈誌

ある自然科学者の手記(17)

物理の話(35)

短歌に詠まれた茂吉(45)

楽しい時間(11)

子規の短歌革新とアララギの歌人(15)

富士山の短歌(1)

「水魚」のことから(153)

ことのはスケッチ(418)

編集室だより(二〇一三年八月)

和菓子街道(84)

お知らせ・編集後記・三河アララギ規定

貫名海屋資料館

寺田	秀夫	(29)
菊池	祐奈	(29)
北原	奈菜	(29)
いーは	とぶ	(30)
植村	公女	(31)
一石		(32)
鈴木	孝雄	(33)
山口	千恵子	(34)
半田	うめ子	(35)
安藤	和代	(36)
大橋	望彦	(37)
今泉	雅勝	(38)
一石		(39)
鮫島	満	(40)
山本	紀久雄	(41)
佐藤	喜仙	(42)
夏目	勝弘	(43)
岡本	八千代	(44)
今泉	由利	(45)
平松	温子	(46)

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

姫春蟬の季はすぎをり多福庵の礎石に沁みて鳴く法師せみ

P
58

なびきあふ紅萩いまだの下にして早くも撓む花の白萩

P
60

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

生か死か二つに一つとるならば生きるしかないスモンの吾も

プラタナスの葉は落ち果てて枯れし実の朝の風に振れ合ひて鳴る

スモン病み彼岸過ぎゆく日となりて店頭にわれは足温器さがす

赤蜻蛉

蒲郡 岡本八千代

あちこちに赤とんぼ飛び交ふ今朝のあさ思はず夫をイサオさんと呼び

朝早く青木さんよりの電話の声ああ幾年ぶりか奥三河の君の

君とわれ蒲郡駅にて別れる時アキツ飛び舞ふを見てゐたりきに

東京の若者^{わか}たちも帰りたり蛻^{もぬ}けの殻とはこのことかしら

いつまでも寝つきわろければまた起きて本を読めよと先生言ひたまひき

短夜^{みじか}のこの夜も眠れずつひに起きて何かを読まむと本をばさがす

この夏の暑さにも負けてオロオロとお菜買ひにゆく日傘をさして

夫のものわたしのものもみな白くけふの太陽の光の中かな

わが街にも「節水に協力を」の通知あり惜しみつつ注ぐ野ボタンにさへ

乞ひ乞ひし雨が降りけり夜の雨ポストへの路傘さして嬉し

西瓜

東京 今泉 由利

自らの種を育む手段かと赤きスイカはいとほしく食み

こんなにも内に水分含みゐる西瓜の造形描きてゐたり

幾すじも光は光り流れ星縮小宇宙のプラネタリウム

私の空を狭めて高層のビルは建ち建つ何を思はむ

何処も彼処も山また山のそれぞれの名前もちをり天地山ふところ

深深の緑緑の静寂のフイトンチッドに守られ眠る

八分前太陽い出こし次々光熱く熱く次々届く

自の宇宙感覚正しをり百四十億分の一太陽系ウォーキング

生え初むる莖伸ばしゆく蕾もつウバユリ一世アイホーンにあり

ひと日ひと日一ヶ月のたちしとき完成したり直ぐ立つ蒲の穂

女三代

豊川 弓 谷 久 子

話す事もさして無けれど満ち足りぬ女三代枕並べて

空爆より六十八年サイレンの響けば今年も黙禱す

話し合ふ人も無ければ凄まじきあの空襲も我が胸の中

かめいっばい高砂百合の花を挿す迎え火送り火無き私の盆

去りてゆく後姿の夫の夢まざまざ見たり盆も終りぬ

我が庭に百日紅の咲き盛る酷暑の中を息苦しきまで

星の流れる今夜は明日もつつが無く暮せるようにと願ひて眠る

食欲失せし我にと子より届きたる白米その名は「龍の瞳」

おむすびに今日は握らむ「龍の瞳」真赤く漬けし梅干し入れむ

逝きし人偲ぶにふさわし庭先に鉦たたき啼く夜もすがら

初秋

新城 青木玉枝

こんなにも侘しい老いを迎ふると予期せぬわが身明日は知らねど

杖と手押車たよりにて歩む土手の上初秋の涼風頬に受く夕暮れ

旅ツという一字をぢつと眺めおりもろもろの想ひ残り世の旅

南へと去りしか軒舞ふ群つばめ二三日前から姿見せず

朝起きて甲がはれてる両足をさすりつ足の運動からまず

暁に亡夫の夢見て安らかな顔夢でもいいよ毎晩見たし

この足で故里の砂浜もう一度歩いて見たい夢にまで見て

虫の音か河鹿の声かわが寝ねるベッドにひびく鈴ふるメロデー

老いて今この山里に謝し乍ら今だ都会の雑音恋しき

人去りし施設の玄関静もりて今日のひと日も暮れてゆくなり

聴覚

東京 佐藤喜仙

子供の頃買った飴屋も駄菓子屋も今は携帯不動産売る

揚花火一発ごとに奇声あげ肩寄せあつて親子の絆

今日もまた外はガウガウウンウンと風が吹き荒れ木の悲鳴聞く

六月に世界遺産に登録の富士はこの日も頭にはぐれ雲

峡の茶屋客の手の上豆置けば山雀スイト来るや持ち去る

名古屋城の天守をかこむ石垣のすき間より出て体ほす蜥蜴

一人旅ローカル線の駅に立ち青田吹き抜く風に打たるる

花白き泰山木の見事なりそのみならず葉の冴えわたる

溪流の釣り師不漁には竿なげて地に身を投うじ木の香をあぶる

聴覚の無きメンバーの太鼓会空気の揺れで音ぴたり合ふ

仕来り

豊川 内藤 志げ

傘をさし門道ゆつくりひと回り千歩の歩みに五十歩足らず

暮れ残る散歩の途中墓に寄り日照る墓石に水をば注ぐ

施餓鬼にとオモダカ菊に小判草八重のコスモス友より届く

妹はわれを見るなり臥して泣く義姉に逢ひたい別れがしたいと

義姉あね様に静かな内に逢はせむと妹を伴ひ斎場に向ふ

草かげより小さき蜥蜴走り出づ蜥蜴色なし艶よき蜥蜴

穴蜂の羽根をかかげて蜘蛛がが行く日照りやわらぐ舗装の道を

水道の熱き水にて盆笊の色よき紫蘇の紫洗う

舅より精霊祀りの仕来たりを三度三度に十膳の膳

精霊に三度の食事に十膳をわれの代だいにて変へむと思う

山家の夕暮れ

岡崎 林 伊 佐 子

裏山に蝟なけば次つぎと啼き渡りゆく山家の夕暮れ

一夏を力のかぎり啼き終へて油蟬ひとつ酷暑の野晒し

酷暑とも猛暑ともいふ日々続く隣の町の畑に通ふ

草刈ればあらはに飛び立つ紋白蝶草生もとめて浮き沈みする

目にしみる汗ぬぐひつつ鍬置きて紋白蝶の遊泳を見つ

玉蜀黍の蔭に身を寄せ炎熱に茶を飲みながらしばし憩ひぬ

とりたての茄子胡瓜など子や友に配りて行くのも吾のたのしみ

昼の畑を耕す吾を頻しきめぐりあかね蜻蛉はたのしくあらむか

玄関に夕べいぶせる蚊取器に渦巻き模様の灰型のこる

命あるかぎりは癒えぬ耳鳴よ時には疎まし眠れぬ夜は

滾々と湧く水とぼしきこの夏は夫が生まれて初めてと聞く

白色

豊川 安藤 和代

娘を思ふ親心にも容赦なく医師はテキパキと病名告ぐる

本当に悲しみ悲しみ深ければ涙など出ないと今し知りたり

痛みあれば吾も痛けれ苦しかば吾も苦しき娘に付き添えば

花ひとつ縫いぐるみひとつ飾りやれぬ無菌病室冷たき白色

朝が来て夕が来たればまずひと日事なく過ぎしを神に礼言ふ

向日葵は高だかと咲けど娘の病一進一退一ヶ月過ぐ

老いの身に重くのし来る荷であれど背負い進まんカナ咲く道

高熱の続きうつろなる瞳でも娘は小さく吾に礼言ふ

熱下がり眠る娘の横顔にままごと遊びの童顔を見る

内孫も外孫も一緒にすいか食ぶ喜ぶ顔もまた悲しけれ

今の今

大阪 伊藤忠男

傘さしてこそ紫陽花詠まむとす今は浮かばぬ青空の下

我が身体日射しを受けて熱熱熱肌に触れなば火傷するかも

暑さには暑さで返すことありと今日は焼き肉囲む食卓

この世では過去も未来も幻にあるのは今の今生きる今

悔いなしと思ひ眠るが望みなり充ちた日にこそ明日への夢が

良き友の助けに運とツキのみで我の人生今ここにあり

喜びに楽しみ多く悔いもなしその日々にして今の今日

生え立てる土質に変化する紫陽花花の色をば思ふこの頃

車窓から霞む豊橋遠ざかる忍ぶ思ひは学生の頃

菜園

春日井 清澤 範子

梅雨空の曇りをりしも椿木にかすかに西陽赤く照らすも

腰痛になればラジオ体操も椅子に座りて手足の運動

高蔵寺駅のはりにつばめの巢赤きポールあり頭上注意と

この夏は夫元氣にて菜園に胡瓜トマト生育のよし

今日も来て夫と拝殿に手を合わす神社の境内蝉しぐれの中

手を引きてくれる娘はヘルニアにかかり病院へ点滴に通ふ

夫も吾も病氣持ちつつ娘の世話に付添ひて早や一日暮るる

ヘルニアにかかる娘の点滴に吾は安定剤のみて見守る

菜園にて夫の作りし小玉西瓜水道の水にパリッと割れ目

夫の菜園は所どころに工夫あり廃物利用もあちらこちらに

瀬 音

沼津 鈴木孝雄

ウバユリは葉を枯らしても花咲かせ子の行く末を見届けるごと

緑花花粉は茶色のウバユリの茎に秘めたる揺がぬ緑

姥百合は花若々しくも慎ましく姥と云う名は大誤名なり

毛穴より温泉成分滲み入りて悪しき所刺す下部温泉

夜が明けて河鹿の澄んだ高い声溪流の音もろともせず

ソーダカツオがシイラが走る静浦湾夏休み入りで海は全開

狩野川の黒瀬の流れ速くして瀬音聞きつつ夏を送る

忙しなく鳴き始めたるクツワムシ夏の盛りを追いやる如く

頭上よりヘリの爆音聞こえども見上げる気起きぬ今日の炎熱

居酒屋のメニューに見慣れぬマクロビは創作和食の魅力を増すか

おもかげ

東京 足立晴代

立秋を迎えし後もあつき日の涼を求めて水辺恋しき

緑濃き山々ありてのびやかに育ちし父のおもかげを偲ぶ

はかなくも事故にて散りし祖父偲び健かなれば何を語らむ

風立ちぬ稲穂の波もさわやかに久方ぶりの父の故郷

永引きし咳に悩みし日々ありて薬にたよる情なき吾れ

シャツキリの体操元気に気持良く心も軽く帰路につくかな

水しぶきあびつゝ遊ぶ子等達の楽しき姿涼を求めて

越し方の善きも悪しきも今は早や楽しき事のみ想い出となりぬ

梅雨明けて暑さに負けず日々過す夕の涼風待ち望みつつ

無病息災ひようたんを願いをこめて彫りし盆今沁み々々と眺め入るかな

百日紅

豊橋 胃 甲 節子

宇連ダムの乾く底ひの干割れたる今年厳しき水不足なり

彼く暑き残暑の日々も元氣良く咲く百日紅の強き華やぎ

一粒の吾が種播きたる百日紅忘るる程に歲月過ぎたり

疎ましき鴉漸く去りゆきて揚羽蝶舞ふやや落付きぬ

六十八年過ぎ来し日々の今更に思ひ出だせば涙流るる

六十八年松山の空襲に焼かるる日防空壕にて赤子を守りたり

其の時の赤子は弟六十八歳になるかと思へば感慨深かりき

七月か八月かと呆けし如思へば賞味期限とうに過ぎをり

猛暑の日々弱き体はシャンプーさへつひ躊躇て延ばしてしまふ

もう何も分からぬ姉が妹を「節子」と呼びたると聴けば泣かるる

変わらない

東京 富岡 和子

盛夏あさ紅蜀葵さき亡母想う故郷より移せし一昔過ぐ

知らせ受く蓮の花見を旧友と不忍の池に想い出ばなし

コンクリートの条より出でし大毛蓼しばしば摘枝赤まんなま垂る

ビル増してあちこち探す歩道橋多摩川花火去年より小さく

変わらないカット予約は黒電話とく変りしは白髪と齡

一昨夜微かに触れし草叢に今宵たしかに蟋蟀歌う

秋近し青空さやか下弦月うすく中空昼ごはん頃

待望の秋前線は雨ふらす残り朝顔小さく鮮か

絶えまなく蟬の鳴く鳴く公園に蛸待ち待つ生存否や

日本蒲公英

新城 半田うめ子

一もとの庭中に咲く大切にしているなり日本蒲公英^{たんぽぽ}

学会の人等の来てこわしたり父の大切なる地の神様を

石田坂歩きて居りぬ久々に友と語りつつ緑田の見ゆる

あいらしく猫の遊ぶ今日も又わが庭に来て楽しみて見る

遠近に見ゆるなり町中の屋根の上にて小鳥のゐるなり

賑やかに町裏に見ゆ雀雀のむつまじく舞ふ楽しみ見るなり

白鷺の舞ひて来るなり本宮の森の中より数羽の見ゆる

鳩一羽死ぼうしたり西川の川に流されさびしかりけり

空の晴れからすに追はれ鳩一羽西川の中へ落ちてしまふ

文月の雨

名古屋 近藤映子

つゆ明けて雨のドシャ降る北南名古屋も文月末の雨

わが夫の発熱直ぐに納まらず東海病院行ったり来り

補聴器を付けて玄関出たればけたたまし蟬の合唱一気に聞ゆ

甲子園めざす球児の機敏な試合陰に監督のサインの忙し

わが夫の余命は日々に過ぎて行くジイ／＼蟬の気になる葉月

八月の立秋と言う日の最高気温体温を越す日となりぬ

我夫の発熱又も繰返す余命のゆらぐこの葉月の吾は

外気温41℃と新聞見出し四国と名古屋の差はわずか

わが夫の余命の限りせまれども孫の顔こそ見せたけれ

わが夫の発熱の危機納まればその穏やか顔のみ安心の元

絵画

豊橋 伊与田広子

岩合の猫の社会を見てると人の社会の縮図見る如

島根県は降りて洪水にわが地方降らず取水制限二割となる

洪水に苦しむ地方ありたるにわが地方一滴も降らずなり

日照りにて柿の実落ちをりわれすぐに水遣りしたり柿の根本に

熱中症かからぬように外出を控へて家に閉じ籠りをり

遺作展通知ありたり亡き従兄弟丁度今年は生誕百年か

入口の鶏の絵は最高と思ひつつ見て廻る遺作展

われの目を特に引きたるは生物画曾孫や動物画たる絵

両人は故人となりて夫々に絵画を残し短歌を残す

暑き中富士五湖めぐりバス旅行雪解けしたる富士の頂いただき

送り火

蒲郡 杉浦恵美子

わが右眼新たに得たる眼内レンズ清らかな世界を映して居るぞ

夫婦して酸漿選べるその日常私の許より永遠に去りたり

素麺を茹でるのにさへ夫想ふ何回試せど上手くないゆゑ

どんと一つ足音立てれば蜘蛛何処独りに戻る深夜のリビング

送り火の点火待つ間のつれづれは叔母との会話の行ったり来たり

思ふより低きところに大文字歓声の先人垣の間に

我が父が昔描きたる案内板今年も出されて地域の地藏盆

接待の心太突き幾百杯わたしがこんなことをしてゐる

たったひとり夕餉の食卓間がまたぬ晩酌果てなき夫思ひ出づ

この夏も去年と同じ夫が居ぬ何をすれども後は虚しい

ミソハギ

豊川 平松 裕子

これは雑草これも雑草より分け抜きある我か朝のさ庭に

フジバカマの間にはびこる小鮎草御津先生より教はりしその名

ミソハギかミソハギなのか辞書にひくどちらでも良いと知りてミソハギ

蝸の時は過ぎたり熊蟬のかしましき中石塔みがく

姑の在所の墓地の石塔の間に桔梗の花咲きをりき

丈低く並びて苔むす石塔も遠き祖のもの花を手向けむ

棚下の餓鬼への供飯を残しておくその習はしを今年は止めむ

病む君が大事大事に育てたる大き西瓜を頂き帰る

髪型もその髪色も似合ひゐて明るき君に安堵してをり

我に向きて明るく病を語りゐる君の眼の涙を見たり

玉虫

豊川 小野可南子

細葱にすがれる空蟬その根元羽バタバタと御衣ひとつ

我の撒く水のミストとなるところ暫しホバリングは塩辛トンボ

鉢植ゑの藤にたつぷりと夕の水離れゆかざる足長蜂は

メヒシバのあたりにひと鍬振りおろす二尺四方の黒々の土

すすき穂と見紛ふばかりオヒシバよ伸びに伸びたり我をぞ凌ぐ

ここ幾年慣ひのごとく八月十五日法師蟬の強きひと鳴き

雨とほく畑の土の白々と手に引く夏草根張りもあらず

お御堂のみの長き日陰を伝ひつつゆっくり歩むあか閑伽汲まむとて

雷いかづちのひとつ轟き聞きてより少しく窓を明けて雨待つ

「生きている玉虫が見たい」と言ふ佑真今我が足元に飛びきたりたり

ペンシルバニア

豊川 山口千恵子

紫陽花は散ることもなく夏の日に色の褪せつつ花毬保つ

庭隅にひとり生えなるこの夏の糸瓜は槿の木登りゆく

槿の木の天辺にまで登りゆき糸瓜は黄の花咲かせはじめ

ハナビ草花開くのは午後三時天指す小さき花の揺れゐる

すすすすくと伸び来て青き列となるわが畑隅に蒔ける向日葵

未だ蕾の向日葵すべて東向くやがて花咲くわが畑隅に

天空を飛行機は右にそれてゆくアメリカ目指す桃子の乗りゐる

一年をペンシルバニアに行く桃子炎天の空に飛行機消えゆく

その木の実ミミズの顔に似るゆえにその木の名前ミミズバイとぞ

温暖の地に残る木ミミズバイ佐脇神社の森に繁れる

この夏の変

豊川 夏目勝弘

日の出前同じ所にて蜩は三声を低く鳴くのみにして

夕方に鳴く蜩を聞かずして猛暑の立秋すぎて幾日

この夏の暑さは我も蜩も同じなりけりクーラーもなし

缶ビール買はねばならぬと氣力をば整へ玄關出でてきにけり

部屋内の暑さに耐へて籠りゐし外に出づれば吹く風があり

午前三時と確かめ携帯を枕元へその携帯が見あたらずして

猛暑にて思はざる夢みる多し現に戻るにしばし時あり

黒電話より己が携帯を呼んでみる目覚めぬ脳が番号たがふ

携帯の呼び出音の鳴る方はタンスの裏のあたりなりけり

背表紙

「招待」 秋山逸穂

弓形の浜の起伏のあるところ満ち潮砂をたがやしている

古書店の棚に置かれて大正の匂いを放つ背表紙と会う

はかなげに目の前飛びゆく揚羽蝶我も木漏れ日浴びつつさまよう

土のうえしつかり踏みしめあおぎ見るヒマラヤ杉は頂上見えず

湧く水のゆるる水面のきらめきは野仏ぬぐう所作にも見ゆる

はすの葉によじ登りいる青蛙を視おれば空をうみねこが舞う

天龍峽

豊川 白井信昭

電車にて秘峽天龍をゆられゆく木々の青葉を眺めなどして

天龍峽橋の畔に妻と共に奇岩おりなす水面見降ろす

千年の時を立ち立つネズミサシ向き合ひてゐる妻と私と

家近き引馬神社のこの里のこの夏の声初蝉しぐれ

太陽

横浜 阿部 淑子

照りつける太陽に向け傘させど耳の端焼くるごとき暑さに
きらきらと青葉も光る日盛りに目をまわしたかあおむけの蝉
真夏日の熱中症患者数増せり全国ニュースの悲しきニュース
汗かきて汗にまみれて暑いですぬ知らぬ人とも親しさ増しぬ
イプシロン期待に満ちて秒読みの0ゼロになりても発射叶わず

わが心をば

東京 寺田 秀夫

ばらの花紅色さして可愛らしわが心をばなぐさめにけり
定年を遠くに過ぎてさびしき日レモンは逝きぬひとり涙す

岩手県立水沢商業高校二年 菊池 祐奈

トラブルも悩みも不安も失敗もリセットしたいゲームのように

東京都立大泉桜高校二年 北原 奈菜

田舎からカボチャが届くふつくらと祖父母の丸い背中のような

『いじよとせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

かつてわれに「富士には月見草がよく似合ふ」と書きてくれたる夫よりの手紙
満月の光さし入るこの窓辺我はただただ想ひ巡らす

吉見幸子

真夜中のポストに落とすわが封書君への定期便はラブレターのごと
治療後は汗は出ないと言はれたれどサラサラの胸にうづく何かが

牧原正枝

男の人日傘さして犬の散歩朝の風景も変はり来しかな

朝からのギラギラ太陽蝉の声はやくも今日は大暑といふ日

岩瀬信子

野菜畑の隅の水甕に楚々と咲く淡き紅色の睡蓮一つ

なよなよの葱の苗付け一心に「育てるが好き」と媪は云ひつつ

石田文子

沖繩の碧き海映すメール届く西浦は灰色の空よりの雨

茄子畑の夫の植ゑたる百本に濃紫の実今朝の陽に映ゆ

山崎俊子

「ただいまー」の言葉に思はずおかえりと返してしまひぬお掃除ロボに
還暦の同窓会の通知来ぬああ物故者の名前が多く

水野 絹子

もう少しあそこまでとて草取りをり夕日はいつしか陰りになりつつ
わが畑にて取れたる野菜を箱に詰めるその中にそつと孫へのものも

牧原 規恵

来し方も生き惑ひつつ行く末も夢幻泡影むげんほうやうか空を見あぐる

朝なさな木魚の音の聞えくるつれあい亡くされし君の木魚の

三田 美奈子

亡き友の広々の庭荒れはてて燃えたつごとき凌霄花は

クーラーの電源入れれば風鈴のかすかに鳴れり住み良き時代ときかも

稲吉 友江

通り道のダチュラ白花咲き終へてけふ梅雨明けの光の中に

滋賀の町のメタセコイアの並木道葉緑続くこのシンメトリーは

鈴木 美那子

『俳句』

昼顔やふたりの黙の昼深し

植村公女

戦死せし父に忌のなく終戦日

黙祷やその時ななつ原爆忌

廻るめく時の流れや蝉時雨

一石

涼しげに玉堂描く山河かな

亡き人のふと声がして葉月かな

『かさね』 九月号

身の枷をすこしゆるめて螢の夜

佐藤喜仙

漆喰の破れ土蔵や枇杷熟るる

松本周二

崩落の水河を浮べ夏の海

古川千鶴

夏の灯や航跡彩る隅田川

川井素山

いつとなく空新しき鰯雲

安藤虎醉

池にはる蜘蛛の巣今朝の露びかり

田島昭久

庭下駄を仕舞ひ忘れて戻り梅雨

小池清司

待ち合せ場所までひとり夏つばめ

長久保郁子

大声に汗滴らせフットサル

岡野安雅

凌霄花思はぬ高みに顔を出し

青木英林

豆飯に思い出の顔いくつある

山本達人

風鈴の音弱々し路地の軒

後藤克彦

幼な子の浴衣の袖に宝物

森岡陽子

群青の朝顔揺るる小雨かな

丸山酔宵子

歓声のプール包めり夾竹桃

池内とほる

山荘の窓開け放ち風薫る

橋本修平

垣越しに飛び来る声や水遊び

小柳千美子

夏帯の女船頭声高し

和田勝信

ほろ酔ひに足元暗し螢狩

柳田皓一

梅雨晴に山車曳く声の勢みあり

田中清秀

古都の路そぞろ歩きの浴衣がけ

吉田博行

夏の月老人と犬の影歩く

長島清山

私の一首

静浦港5月連休に鯛来た竿上げる子らの歓声に沸く

鈴木孝雄

沼津市静浦漁港は東京・神奈川などからのアクセスが良く、富士山・駿河湾・伊豆の山々が望める人気の釣り場で、私の好きな散歩道でもある。最近では家族連れ釣りの人が増え休日には賑やかな観光地の様になる。5月連休の頃には鯛・豆鰯が釣れ始めるが、今年は魚の回遊が遅く、連休に間に合うか心配した。いつものように散歩すると、鯛が入り食い状態。子供たちの歓声に私も楽しくなって詠んだ歌。港の楽しい雰囲気伝われば嬉しい。

仕舞ひるし南部鉄釜に飯炊かむ二人の夕餉の白米二合

山口千恵子

長い間使わずに仕舞いこんでいた南部鉄釜を、又使ってみよう。昔の台所にあつたものとは、比べ物にならない小さな鉄釜です。子供の頃は、薪でご飯を炊く手伝いをしたものです。ご飯の炊き上がる匂い、煙、炎の色等六十年も前のことが懐かしく思い出されます。今は、家族も少なく、食卓に昔の賑にぎわいはありません。夫婦二人の夕餉に、この釜で炊いたご飯はとてもおいしい。家族の有り様などにも、時の移り変わりを感じます。

なつかしく思ひ出すなり滝の湯へ行きにしかの日の老人大学

半田うめ子

老いて勉強をしましょうと友人よりの言葉を頂きました。さらさらと流れる滝の湯にての楽しい思い出があります。峰田様に感謝をしつづつ。

逝く先も春が来たかと嫁を恋ふ紫菜花の満開の庭

安藤和代

嫁が逝って三年今年も紫菜花が庭いっぱい咲いた。毎年種を落し手入れもしないのに見事に咲く、花咲けば風吹けば又降る雨にゆく雲に今だに嫁を偲び涙する私。そしてこの花が咲くと嫁も大好きだったこの花に囲まれているだろうと満足する。賑やかに集って咲く紫色は私の体全体を染め心とまされる。紫菜花は少し淋しく少し喜びの混った花だ。来る春も来る春も元気でこの花を見れる事を願っている。嫁に会えた様な気がして嬉しいから。

「歴代天皇御製歌」(十六)

貫名海屋資料館

『元明天皇』第四十三代・女帝・在位七〇七年(四十七歳)―七二五年(五十五歳)

元明天皇、天智天皇と持統天皇の第四皇女。いとこの草壁皇子に嫁し、六八九年、草壁皇子と死別。文武天皇との死別により天皇の位を即位。

武蔵国秩父から、銅ガ献上され年号を和銅とし、和同開珎、銀錢、銅錢を造り流通を計った。平城遷都、陸奥征討計画、古事記の選録、風土記の編纂など実行された。

ますらを(大夫)の鞞とむの音するなりものふ(物部)の大臣楯立つらしも

万葉集 卷第一

宮廷に仕える勇ましい男子たちの鞞音が聞こえる。物部の大臣が楯を立てているらしい。

飛鳥の明日香の里を置きて去なば君があたりは見えずかあらむ

万葉集 卷第一

和銅三年、藤原宮より平城京に遷都し、藤原京の管理者として、藤原不比等を残したとき、詠まれた。

贈呈誌

△青森アララギ 八月号 三浦 登

三人の負ひ籠に余る舞茸に汗あへぎつつ夏山下る

△秋楡 八月号 西尾 清子

窓あける朝日と共に蝶の入る今日の一日の幸せ運ぶ

△高知アララギ 八月号 小原 和子

亡き人と共に生きるは八年目青葉にそそぐ朝の日眩し

△群山 八月号 八木 純

家事の暇に慌ただしく読む妻の為朝刊読みつつ傍線を引く

△榿の木 八月号 滝 朝江

葉桜となりて久しと思ふ木がをりをりこぼす白き花びら

△穂の原 七月号 鈴木 せつ

年老いた我に上着を着せてくれ娘と二人東栄温泉

八月号

老人会寿楽荘に集まりて杖付く我に皆が親切

ある自然科学者の手記 (17) 大橋望彦

『イマジネーション』①

我が家で飼っている犬は、今年7歳になるオスの雑種（シエパードと柴犬）で、生後2ヶ月位の仔犬の時に捨てられていたのを引き取って飼っている中型犬である。名前は強そうなのが好いと思ひ、『DONNER（ドンネル）』即ち、雷神を意味するドイツ名を付している。警戒心が強く、最初は仲々懐かないで、ハリストを繰り返したり困らせたが、最近では番犬気取りでいるところもある。しかし、近頃は、そろそろ老化した所為か、以前には訪問客があると盛んに吠えて、主人に報せていたのが、今は誰にも尻尾を振っていない、夜中に野性の動物（キツネ、タヌキ、猪、ハクビシン、それに野良猫等）が小屋に近づいたりすると、唸り声を出して威嚇する程度である。そのようなワン公であるが、最近一寸面白いことが判った。毎朝、雨戸を開けると、目の前にある工房の中に犬小屋が置いてあり、其処からドンネルはそのと起きて出て来る。そこで、指を回すと、工房のドアのところまで行って帰ってくる。掌を下に向けて、伏せの姿勢をする。そこで、『おはよう』と声を掛けると、『ワーオー』と欠伸のような声を出して挨拶をする。この一連の行事をしてから朝食のドッグフードを与える。これが習慣となつていて、それが、ある朝、雨戸を開けると、小屋から飛び出してきて、マゴマゴしているのである。『どうした？』と声を掛けると、『ワン』という。指を回すと、伏せている。其処で掌を下に向けて『ワン』という。全くチグハグな行動を取っている。これは寝ぼけているな、と、思ったので、『おはよ

う！』と大きな声で挨拶をしたら、ビックリして伏せた。指を回したらば、恥ずかしそうに、ドアの所に行き、帰ってきた。掌を下に向けて、伏せをした。そこで、『おはよう』と、も一度挨拶をすると、『ワーオー』と欠伸をしながらストレッチをしている。確かに、先刻は『寝ぼけ』ていたのだ。犬も寝ぼけるのである。習慣的行動はするのであるが、順序が判らずに、チグハグな行動をしてしまつてゐる。こういう行動は単なる条件反射のような行動とは異なつて、習慣的な行動の整理がどこか違つてしまふ異常行動となつてゐる。これを寝ぼけ現象とみた。犬でも、このような習慣的行動が狂つてしまふことが起きた瞬間に、未だ夢うつつの状態があることが判り、面白く思つた。何かしなくてはならないが、是だつたかな。と、いい加減な行動をしてしまふ。こんな心理現象は一種の『イマジネーション』の変化ではないであらうか。そう想つと、人間ではこのような『イマジネーション』は多々存在する。いわゆる『思い込み』『思い違い』の類の行動として見られるものと思う。ワン公にも『思い違い』があることが判ると、一寸からかいたくなつた。何時も食事の前に、指を3本出して『三ツ』という。すると『ワン、ワン、ワン』と、3回吠える。其処で『どうぞ』というのと、食事をすることが出来る。そういう習慣づけをしてゐるが、その習慣を利用して、先の『イマジネーション』の狂いの実験を試してみた。食事の前に2本の指を出したのである。最初は普通に、『ワン、ワン、ワン』と吠えた。ところが、『二ツ』と言つたので、一度『ワン、ワン、ワン』と、吠える。『二ツ』と言つた。未だ『二ツ』は教えていない。先の『三ツ』は、3回指を出しながらリズムをつけて『ワン、ワン、ワン』と言わせていたのに、『二ツ』と言つて、二回しかリズムが無いのが判ら

ない。数の概念が未だ良く掴めていない。それでもリズムは判っている。そこで、澄まして、再び『二ツ』と、2回指を出す。『ワン、ワン、ワン』と、従順に吠える。『違う。二ツ』と、やる。何回かのやり取りをしたところ、遂に、『フーン。二ツ』と、情けない声を発し『ワン、ワン、ワン』と、声色が変わった。明らかに、指示に従っているのに、何故駄目なのかと言う反応である。そこで、気が付いた。『イマジネーション』の狂いはワン公にあるのではなく、小生（人間様）の方にあったのだ。数を十分に教えていないのに、出来るものであると『イメージ』をしてしまったのは、当方であった。『ああ、勘違い！』。こんな実験は、吟味不足、条件不足な実験としか言えない。こんな実験は、お恥ずかしい限りであるが、人のやりやうなことではある。こんなことが、政治の上で行なわれたらば、とんでもない事となる。いや、それに近いことが、最近あったようにも思う。どこかのもう辞めたお坊ちゃん元首相が、他国に行つて、とんでもない勘違いのことを澄ました顔をして話して鬻ぎ（ひんしゆく）をかつている。『イマジネーション』の狂いだ等という問題ではない、この方、何とかならないものだろうか。

ところで、『イメージ』は、幻想とか、夢想とも訳されているが、実体の無いものを、あたかもあるが如く感じてしまふ現象をそのように言っている。現実の話として、小生は、判然とそのような『イマジネーション』を経験している。ワン公の話とは違い、もつと『イメージ』に近い話である。それは、木彫を始めて間もない頃のことである。毎日、鹿の姿を『イメージ』しながら木彫をしており、色々な鹿の姿が目に見えていた。ある時、所用で、久し振りに電車に乗って都心に出掛けた。幸いに、車内は空いていた。席に腰を下ろ

して、前の席を観た。長い椅子席に若い御婦人や、年配の御婦人が腰掛けておられた。ボーっとしてそれらの方たちを見てもなく見ているうちに、全てのご婦人の顔が、何と、全て鹿の顔になっていた。聊か面喰らった。吾に返ると、そんな失礼なことは跡形も無かった。でも、一瞬でもそのような錯覚に陥ったことは驚きでもあった。それでも、この錯覚は有難いと想った。何故ならば、鹿の顔に色々特徴付けることが出来、微妙にニュアンスの異なる顔つきの鹿の顔が作れることに、自信を得ることが出来たからである。こういうことは、アーチストには必須の条件となるのではないであろうか。即ち、表現力が多ければ多いほど。豊かに表現が出来ると思ふから、その点で少しもその表現力に参考となる事柄に接する機会を得たことに、嬉しい気持ちがあった。

『イマジネーション』は表現力の権化みたいなもので、これ無くしてアーチストとは言えないと言つても過言ではない。この点で、日本人ほど、この表現力の豊富な国民性というか民族は、他に類例が無いと思う。多少、中国はその点で近いとも想われるが、それでも日本ほどではない。詩歌を詠まれる方々は、この点で詳しい方が多いことと察するが、小生のような理系で育つた人間でも、色々知つている表現が在る。そこで、例えば、雨のことを表現するのに、どんな表現があるのかを、自信がないので、ネットで調べてみた。あるは、小雨、時雨、通り雨：雨の強さ、振り方で、種類、季節による雨の表現にも、梅雨、五月雨、キツネの嫁入り、夕立等：21種類、その他にしても、翠雨、瑞雨、慈雨、集中豪雨、ゲリラ雨、時として、生物雨（魚など生き物が空から降ってくる）、放射能を持つ黒い雨等々沢山ある。そして、それらの色々な雨の降る様を表現する擬音語がまた素晴らしい。

絹の話 (35)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

絹と女の目

絹は繭の種類、糸の作り方で様々な輝き、艶の違いが出て来ます。紡ぎ(紬)であれば鈍く光るし、生糸であれば艶々と柔らかい輝きに満ちます。それが精練や撚糸の仕方でも微妙な違いが出て来て千変万化、尽きる事は有りません。更に仕上げのアイロンの加減でも輝きに違いが出て来ます。特にヤマユガ科のタサール蚕、ムガ蚕の糸は顕著です。

〈絹と輝き〉

絹は自然光の中で美しく輝きます。最近省エネで波長の短い灯具が奨励されていますが、残念ながら絹はその光に当たって人をハッとさせる輝きを見せません。絹(特に山繭)は光の中の波長の短い紫外線領域の部分(他の繊維より少し多く吸収して(恐らく熱に変換)、繭の中に動かないでいる蛹の遺伝子の異変を防ぐ為に機能している)と思われまます。

一方波長の長い光は繭のお握り型(家蚕)台形型(野蚕)繊維に当たって多くが、少なくなった紫外線と一緒に乱

反射(一部吸収)し、素晴らしいオーロラにも勝る微妙な美しい艶となって目に入って来ます。

従って省エネランプのデパートでは売上が上がりません。お願いして、波長の長いランプを持参して設置すると売上が倍増する事も有ります。しかし有名デパートほど許可してくれません。たまたま自然光の入る窓際で正面から自然光が当たる場所を得た時は予想を遥かに超える売上になる事があります。

〈女の目男の目〉

あるデパートの自然光の入る出入り口の側面で野蚕シルクストールの販売をしていると、中年の品の良いご夫人が「通りかかって出口まで行ったが、あまりにも美しい艶に後ろ髪を引かれて戻って来ました」と言って3枚もお買い上げ頂きました。

また、ある百貨店で2フロアー吹き抜けの高いエスカレーターの上から(距離約15m)「何とも不思議に輝く物が見えるので見に来た」と天然で黄金に光るムガ蚕(野蚕)のストールを頼りせんばかりにして求めて行かれました。実は、この様な事例は野蚕シルク販売では日常の事なのですが、男性にはあり得ない行動です。

男には理解し難い女性の目の力を解明すべく、つくば

市の産業技術総合研究所の光部門に通う事になりました。男性は基本的に色盲で、女性に色盲は無く、色の識別範囲は男性より広く深く、男性が認識出来ない微妙な色艶を感じ取れるのだそうです。

野蚕シルクは男性には感知しない光波を出している様です。ところが女性は1m位の手の届く範囲になると眼力ばかりで判断しません。指先が目となります。触覚判断は光ほど早く有りません、個人的にも大きな差が有りませんが、蓄積された過去の触覚経験と照合するのです。しかし、少し時間がかかります、それは幸福ホルモンが分泌される楽しい時間でもあります。それが理解出来なくてイライラする男性がいますが、野暮な事です。

男は黄色しか見えないモンシロチョウに近いと思うと何となく情けなくなりません。女性は洋服やお化粧の色に工夫を重ねアピールしていますが、男性の目には自分が思っている様には映っていないのではないのでしょうか。

草木染めをしていると、時として男の目には失敗作と見える色が仕上がる事が有ります。恐る恐る売場に出してみると「こんな色に出会いたかった」と感激される事があります。染め物の色チェックは女性に限ります。

〈560ナノメートルと云う光〉

光は波長によって赤、黄、紫と識別される色が違いますが。果して絹はどの様な波長の光が当たった時最も美しく輝くのでしょうか。タサール蚕やムガ蚕など多孔質の繊維の織物は560ナノmの所で最高値を示します。

この値は糸に含まれる茶色のタンニンに影響されるものかも知れませんが、その輝きは台形の表面と多孔質内で激しく乱反射したるものと思われます。

従って絹を最も美しく見せるには560ナノmの波長を持つ照明器具が良いと云う事になります。

絹を着た時は直接光を受ける所に立つとよく輝きます。今迄多くの女優さんの衣装を作らせて頂いて来ましたが素材と色はライトアップされ、放映されると、直接見た時と視聴者には違って見えるのだそうです。絹は衣装やメイクにも艶が出ると云うので、素材選びもライトの関係を考慮しながら、慎重を期さなければなりません。同じ絹でも繭の種類によって艶が違います。目視や触覚でこれを見分ける事は大変むずかしいので、何とか絹識別ルーペを作りたいたのですが、日暮れて道遠しです。また品選びに夢中になっているお母様の脇で、無感動で立っている若いお嬢様を、上記では説明出来ません。

物理学者と詩歌の世界 (45)

一石

レオン・レーダーマン

レオン・マックス・レーダーマン (Leon Max Lederman, 1922-) は米国の実験(素粒子)物理学者。ニューヨーク州バッファローのロシア系ユダヤ人の家庭に生まれた。1943年ニューヨーク市立大学シティカレッジ卒業。1951年コロンビア大学で博士号を取得、その後コロンビア大学のスタッフとなり、1958年に教授、1978年から1988年まで国立フェルミ研究所の所長を務めた。コロンビア大学退職後も、シカゴ大学、イリノイ工科大学で教えている(参考資料1)。

学術上の主な業績に次のものがある。1) 1956年に「寿命の長い中性のK中間子」を発見した。この中性のK中間子は今日ではCP対称性という重要な研究のための道具になっている。2) パイ中間子-ミュー粒子のパリテイについての研究から、1957年中国系アメリカ人のT・D・リー(李政道)とC・N・ヤン(楊振寧)が理論的に予言したパリテイの破れの実験的な検証を行った(リーとヤンは1958年にノーベル物理学賞を受賞)。3) 1962年にブルックヘブンの陽子加速器を使って、ニュートリノの反応を調べ電子ニュートリノ

とミューニュートリノが別のものであることを証明した(注1)。4) 1977年ボトムクォークと反ボトムクォークの対であるウプシロン中間子を発見した。1988年にM・シュワーツ、J・シュタインバーガーと共同で「ニュートリノビーム法、およびミューニュートリノの発見によるレプトンの二重構造の実証」によりノーベル物理学賞を受賞した。その他の受賞に国家科学メダル(1965)、ウルフ賞物理学部門(1982)、エンリコ・フェルミ賞(1992)など。

「笑う実験物理学者」の異名をもち著書に『神がつくった究極の素粒子』(参考資料2)などがある。

次は、レーダーマンに関するエピソードである。

1) 『神がつくった究極の素粒子』の「訳者あとがき」によると、ビッグス粒子を見つけるべく、1993年の出版当時SSC(超伝導超大型加速器)という世界最大の加速器建設を推進していたが、議会で予算が削減されそうになったので、プロジェクトの責任者であったレーダーマンは一般人を味方につけようと、本書を書いた。しかし、彼の奮闘空しく、結局1994年、議会はSSCに予算を付けず建設は頓挫した(プロジェクトが中止された時点で、既に建造費の20億ドルが費やされ、トンネルは22・5kmが掘り進められていた)。その代わりとして建造されたのが、本年(2013)ビッグス粒子を見つ

2

けたと言われているCERNの大型ハドロンコライダーLHCである。一般向けの解説では、ビッグス粒子はよく「神の粒子」として紹介されている。

1950年の頃、コロンビア大学の大学院生だったとき、私(リーダーマン)はアインシュタインに会うというまれな経験をした。私と友人の院生は、アインシュタインがプリンストンの自宅で食事をするために通る道端で、ベンチに座っているようにと教えられた。助手を伴ってやって来るアインシュタインを見て、私たちはベンチから飛び起きた。助手は、学生たちと話してみる気はあるかとアインシュタインに聞いた。「ああ」と教授は答え、私の友人に

「君は何をやっているのかね (Vot are you doing?)」とドイツ語訛で尋ねた。「僕は量子論に関する学位論文を書いています」「アハッ」アインシュタインは言った。「時間の無駄じゃ (A waste of time)」。それで、君の方は?」私はもう少し自信があった。「僕はパイ中間子の性質を実験で調べています」「パイ中間子、パイ中間子!アハッ。電子は分かるとるのかね?なぜ、パイ中間子なんぞにかかずらうんじや? (Vee don't understand de electron! Vy bother mit pion?)」まあ、幸運を祈るよ、お若いの」というわけで、30秒もしないうちにあの偉大な物理学者は二人の冴えた若手の物理研究者を粉砕してし

まった。しかし私たちはうわの空だった。ともかく私たちは、史上最も偉大な科学者に会ったのだ! (参考資料3より)

注1

ニュートリノとは物質をつくる基本粒子レプトン(軽粒子)の仲間。電氣的に中性で、ほかの物質とほとんど反応せず、「幽霊のような素粒子」とも呼ばれる。3種類のニュートリノ(電子ニュートリノ、ミューニュートリノ、タウニュートリノ)が存在することがわかっている。電子ニュートリノの存在は1930年代初め、W・パウリがベータ崩壊でエネルギー保存則が破れてみえることからその存在を理論的に予言、56年にF・ライネスらが検出した。リーダーマンらが存在を確認したのは2番目のミューニュートリノである。近年、ある種類のニュートリノが別の種類のニュートリノに変化するという「ニュートリノ振動」の現象が発見され、ニュートリノには質量があることがわかった。

参考資料

- 1) Wikipedia, the free encyclopedia: Leon Max Lederman
- 2) レオン・リーダーマン『神がつくった究極の素粒子』(草思社)
- 3) CERN Courier Vol. 49, No8, October 2009

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

十二 柴生田 稔 1

柴生田稔年譜(四男晴四作成)の大正十四年(一九二五)に、第一高等学校在学中「暑中休暇中に、雑誌『改造』九月号特別号に発表された斎藤茂吉の『童馬山房雑歌』を読み、初めて短歌に興味を持つようになる」とある。

そしてその二年後、東大在学中のこととして年譜は、「深田久弥の紹介で、アララギ会員吉田正俊と知り合う。十二月、吉田にともなわかれて、アララギ発行所の面会日に出席、初めて斎藤茂吉、土屋文明にまみえる。斎藤茂吉の作歌指導を受け、アララギに入会する」と記す。
こうして茂吉に師事することになって以来、柴生田は作歌と研究に没頭してゆくことになる。

師の君の結びたまへる草鞋はきてわが越え行かむ青
山の上 昭和五年 「アララギ」九月号
こまごまと山路の歩み論したまふ君に先立ちて心う
れしも
大峰は朝焼けしたり後れあて君と言交はし歩むたの
しさ

右は高野山で開かれたアララギ安居会に初めて参加したときの作である。歌には師とともにいることのうれしさが率直に詠まれているが、茂吉の若い弟子に対する心遣いの方が印象的である。

柴生田の歌で注意しなければならぬのは師を詠むのに「茂吉」の名を使わず「君」と表すことが多いことである。これは、のちに土屋文明をいうときにも「君」としていることが少なくないので煩わしいのである。茂吉の日記によると、右の安居会の帰途に飛鳥に立ち寄っているので、柴生田の「ここにして大和吉野の山隔り籠もれるさまを君はゆびさす」「松植ゑて北に向へるみささぎのいたく明るきを君は言ひ出づ」もそのときの歌であろう。

ともなはれ君に見えし日を思へばただならぬ幸も多
く慣れたり 昭和八年 『春山』
この友につれられゆきて一生の師にまみえにし日も
六年を古りぬ 昭和九年 同
地下道に二人となれば言ひ出づる君にはじめて見え
にし日を 昭和十一年 同

先の年譜に見た茂吉にまみえた日のことを詠んだものである。「ともな」った人、「この友」は吉田正俊である。

あの昭和二年のことを柴生田はのちに、

苦しみ努めし君なりしかど大正十四年その時君なほ
四十三歳 昭和四十八年 『星夜』

君を知り吉田正俊君を知りたる縁にて我は斎藤茂吉
先生に見えぬ 昭和五十九年 『公園』

と詠んでいる。一首目は、冒頭に引いた年譜に一致する
内容である。二首目も同様であるが、晩年の表現が自在
になっていたとはいえ、大幅な字余りには懐かしさが溢
れているといえよう。

あわただしく明日み葬はふりに発ちたまふ二人の君よつ
つがあらすな 昭和九年 『春山』

柴生田が、「夜おそく心たかぶり帰り来てつひにさび
しくなりて坐りぬ」と詠んでいる中村憲吉の逝去にかか
わる。「二人の君」は茂吉と土屋文明であろう。二人は
広島県布野での葬儀のために出かけたのだが、柴生田は
じめ門人の何人かが東京駅まで見送ったのであろう。

あふぎたのむ師のみちびぎにあひ寄りて一生の道を
われら行くべし 昭和十年 『春山』
あかつきをひさしく覚めて涙うかぶ友の誰よりもわ

れは幸あり

題に「約婚」とある。柴生田は明くる春に結婚するこ
とになっており、右の二首はその前祝いか結納の儀かに
関すると思われる。「あふぎたのむ師」に結婚の媒酌を
してもらうことになり興奮しているさまが「われら行く
べし」「涙うかぶ」等に如実に表れている。年譜には、
この後のことが「昭和十一年（一〇三六）四月、斎藤
茂吉、土屋文明の媒酌で谷井澤と結婚」とある。

いそがしき一夜をわれらにさきたまふ君にともなほ
れ銀座に降りぬ 昭和十一年 『春山』
人群るる舗道をわけてただに樂し君に従ひてわれら
歩めり

歌の背景はよくは分からないが、一首目の上句から考
えるとさきの婚約のことにかかわるものかと思われる。
若い作者にとつては茂吉につき従うことがただただ嬉し
いのである。

師とともに歩くことの楽しさは、山口茂吉も堀内通孝
も佐藤佐太郎も詠んでいる。師と四人の弟子とのつな
がりの深さは随所に読むことができる。

楽しい時間 II

山本紀久雄

2013年8月31日

蕨市のいーとびあ「辻照子先生の料理とマナー」の7月テーマは「焼酎&カクテルのいろいろ」。今日も暑く、辻先生の説明に入る前に、和田さんの好意でコップ一杯のビールが出た。よく冷えていて美味しい。料理メニューは三つ。「ミートローフ」「豆腐サラダ」「サワーライス」。「ミートローフ」のレシピを何気なく見ると、何やら知らない表現がある。

「パンは牛乳でしとらせておき」とある。この「しとらせて」、今までに見たことのない言葉である。隣席の岡本夫人に尋ねた。「それは湿らせるといふような意味ですかね」という。自宅に戻ってパソコンで調べてみると「これは立派な標準語で、しとる（湿とる）は、しめる（湿る）、うるおう（潤う）の同義語です」とある。次に広辞苑を引いてみたら「しとらせて」はないが「しとり・湿」はあり、意味は「しめり。うるおい」とある。辻料理教室に参加するといろいろ勉強になるなあ、と再確認した次第。辻先生に感謝＝

ところで、今日は家内と旅行に行くため、途中で退席しないといけない。その旨を辻先生に伝えると、「皆で調理した三品を食べる時間がありませんね。では、これを食べてください」と、先生お手製の三品を一皿に入れて持って来てくれた。

恐縮しつつ、調理しているグループメンバーの傍らで立ち食いです。こういう食べ方もなかなかいいなあ思いつつ、そ

ういえば最近ヒットしている「俺の」シリーズレストランを思い出す。すべて立ち食いスタイルで、イタリアン、フレンチ、割烹と21店舗を展開させ大当たり、今秋にはニューヨークに進出するという。経営はブックオフコーポレーションを成功させた坂本孝氏だ。

ということ、先日、昼食時間帯に、代官山の「俺のフレンチ」に行ってみた。12時前だが既に十数人が並んでいる。こんなに人気があるのかを確認、食べるのを諦めたが、ここに入った若者に聞くと「この間は一人で八千円かかった」という。「えっ＝立ち食いだろう」と聞くと「酒を飲むと高くなるのだ」という。そうだろうと思う。アルコール類をオーダーすると高いのだ。皆さん、よくご存じの「ギョーザの満洲」、先日、四人で行って25,000円払ったという若者にも会った。もう一人、サイゼリアで15,000円という若者。いずれもアルコールを多くオーダーしたからだという。安い価格で展開している店でも、酒類を多く飲むと、結果として高い支払いとなる。当たり前のことだが、この場合は自覚しているので、高い支払いでも仕方ない。

だが、メニューを見ないで、それも店側があえて見せない場合は、大変な事件になる。数年前に大きな話題になった「ローマぼったくり事件」を思い出す。

当時の日経新聞（09・7・31）報道から紹介したい。「ローマの有名レストランで日本人観光客二人が法外な値段を請求されるといふトラブルがあり、イタリア政府は9日までに、おわびのため政府の費用負担で再び同国を訪問してほしいと呼び掛けたが、二人は『イタリア国民の税金を使うことになる』として招待を辞退していたことが分かった。

二人は6月に有名レストランの昼食でサービスタ1115ユーロを含む計694ユーロ（約9万3千円）を請求され、支払い後に警察に届け出た。警察が詐欺容疑で捜査するとともに、ローマ市が同店を「衛生管理違反」を理由に閉店させた。ニュースはイタリアで大きく報じられた・・・というものの。

この新聞報道後、ローマに行ったので、早速この有名レストランに行ってみた。ここはナボーナ広場近くで、界限には最高裁判所、上院議員会館もある地区。ここで長らく営業している「PASETTO パセツト」である。ここで支払われた領収書がイタリアのTVで放映されたので、内容は公開されている。それによるとカキ12個とロブスター2キロ、スズキ1.5キロ、ワイン、パスタとジェラートを注文している。こんなに高級な代物をオーダーしたら確かに高いだろうと思ったが、さらに、地元の人に聞いてみると驚くことが分かった。それは、この二人に誰もメニユーを持ってこなく、英語を話すやさしげなウェイターが来て、「私を信用してください。私がメニユーを選びをやりますから」と言ったという。つまり、メニユーは客が選んだのではなかったのだ。客のほうは、一皿がいくらするのか、わからないまま食べたということだ。しかし、料理は美味しかったらしい。それはそうだろうが、請求書を見て楽し



い気分は吹っ飛んだ。トータルの請求金額694ユーロ、二人は間違いではないかと思っただが、クレジットカードで一応支払ったわけである。

しかし、払いはしたが、チップが20%という法外の要求が問題だった。チップとは、サービスタに感謝して支払う性質で、請求書に事前に印字し書くものでなく、それも20%とは相場よりバカ高い。二人はさすがに抗議したが、この店の相場だと言って取り合わなかったという。それで二人はレストランを出て、警察へ駆け込んだという次第。

同レストランは、チャリー・チャップリンやゲレス・ケリーも訪れたという149年の歴史を誇っていて、ガイドブックに「日本語メニユーあり、良心的な値段」と書いてある店。

だが、今回の代償は大きかった。保健所の検査を受けることになり、結果は衛生基準を満たしておらず、「不潔な環境、機能していない冷蔵庫」などで二カ月の閉店となった。魚介類を売りものにしていないのに、冷蔵庫が機能していなかったという問題多い店が「有名店で老舗」としてローマでは認識されていたのだ。

ローマでなくともレストランで食事する際には気をつけたい。まず値段の書いてないものは食べないことだし、飲まないことだろう。また、レシートはくまなく見て、おかしいと思ったら聞くべきだ。これから海外旅行に行く方は注意してもらいたいと思う。

辻先生調理の三品立ち食いから、ローマまで話題が飛んだが、食べることは、本来、楽しいもの。それが後々まで問題を起すことになると、楽しい雰囲気は吹っ飛ぶ。要注意だ。

子規の短歌革新とアララギの歌人 (15)

佐藤 喜仙

(三) 歌よみに与ふる書―第四回―

今月の要旨

① 実例をもって示すという事

② 実例四首とその解説

③ 実例をもつて示すという事

「拝啓、空論ばかりにては傍人に解しがたく、実例につきて評せよとの御言葉御尤と存候。実例と申しても際限もなき事にて、いづれを取りて評すべきやらんと惑ひ候へども、なるべく名高き者より試み可申候」
解説も不要な簡潔をさわめた名文である。

④ 実例四首とその解説

まず万葉集の代表的抒情歌人の「柿本人麻呂」を取り上げている。

もののふの八十氏川の網代木にいざよふ波のゆくへ知らずも
この歌は上三句が無用で全く役に立っていない。この歌をもって名所の歌の手本とするのは間違ひである。何故ならば名所の歌というものはその地の特色をはつきりとうち出していなければならない。この歌のように名所

たる由縁を詠っていない意味なき名所の歌は、本来の名所の歌とは云えない。

次は宇田天皇に仕えた平安前期の歌人で、「古今集」以下の勅選和歌集に約二十五首入集されている「大江千里」の歌を引いている。

月見れば千々に物こそ悲しけれ我身一つの秋にはあらねど
この歌は百人一首にも入っているので人々の称賛を得ているが、下二句は理屈を述べている歌である。歌は感情を述べるものであるから、理屈を述べるのは、歌を本當に理解していない人のすることである。

最後に幕末・明治初期に活躍した歌人「八田知紀」から二首を取りあげている。

吉野山霞の奥は知らねども見ゆる限りは桜なりけり
うつせみの我世の限り見るべきは嵐の山の桜なりけり
前首の「霞の奥は知らねども」はやはり理屈である。「見ゆる限りは」と云つて案に霞の籠りを示しているのに、わざわざ「霞の奥は知らねども」という必要があるだろうか。

後首は、これまた理屈ばかりの俗物である。
嵐山の桜の美しいのは客観的事実であるが、それを空蟬に託し、一生その桜を見るのであらうという変な趣向をこらしたところ、最も理屈的殺風景で、この歌には良い所が全く見当らない。と手厳しく評している。

富士山の短歌（一） 夏目勝弘

新幹線で東京に向うとき、子規の「月見んと富士に近よる一日づつ」を思い、そして赤人の「田子の浦ゆ打ち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける」が出てくる。

先人達はどのような富士山の歌を作ってきたのだろう。万葉集、新万葉集（明治初期より昭和初期まで）昭和万葉集（昭和元年より昭和四十七年まで）より書き出してみる。

万葉集・高橋虫麿

○富士の嶺に降り置ける雪は六月の望に消ぬればその夜降り
○富士の嶺を高みかしこみ天雲もい行きはばかりたなび

くものを
東歌の相聞

○天の原富士の柴山木の暗の時移りなば会はずかもあらむ

○富士の嶺のいや遠長き山路をも妹がりとへばけによばず来ぬ

○霞ある富士の山びに我が来なばいつち向きても妹が嘆かむ

万葉集の富士山の短歌を調べている時、富士山が世界文化遺産になるニュースを見た。

新万葉集、昭和万葉集には、どのような富士山の短歌が作者はと興味が出てきた。

新万葉集（昭和十三年一月二十日発行）作者は宮廷、諸臣、宮中歌会撰者、歌人、知名人、一般投稿者（四十万人余）巻一（あ・い・う・の部）649名

赤川誠一（二五歳・東京）

○夕富士の影ひくなかに村あれかほのけき灯かたまりて

見ゆ（山中湖畔）

○ここにして見ればさびしきわが村や夕べの富士の影ひくなかに（籠坂峠）

赤木毅（四十三歳・岡山）

○遠く行く人の心の寂しさに富士も黙して見送れるかな

巻二（え・お・か・の部）741名

太田茂一郎（三十六歳・長野）

○街屋根のなみつつぎたる上にしも大きく富士の山はれにけり（富士吉田口）

高野正一（明治四十一年生・埼玉）

○藪の値はあまたに安し富士登山のくはだてなどは思いとまらむ

笠井京平（三十三歳・岡山）

○月讀は火口の上へ廻りたり焼け亡びたる山の寂けさ

○木も草も生ひねばものこゑはなし巖にきびしき真夏の光（山頂久須志神社に奉仕）

卷三（き・く・け・こ・の部）649名

木村捨録（明治三十年生・福井）

○大空は澄みきはまりて富士が嶺の裾野の廣田刈るべくなりぬ

北原白秋（明治十八年生）

○鳥のこゑ聴くと子ら率て我が宿る富士の裾野の大きな根はも（須走吟行三首）

○朝山は風しげれけりや夏鳥の百鳥のこゑの飛びみだれつつ

○夏の富士雲行しげしましるくぞふりおける雪の巒は見えつつ

九條武子（四十二歳没）

○うつくしきこの曙の富士と吾と国土おなじう生れつる幸

久保田不二子（島木赤彦の妻明治十九年生）

○庭つつき松の林をのほり来て富士山をあふげり雲はるる日は（富士見高原）

久保田初瀬（三十六歳・長野）

○冷え切りし足をちぢめてあなさびし天の鳴る音に耳をすますも（八合目に宿る）

「氷魚」のことから (153) 岡本八千代

炎天下のつづく昨日(8月22日)、第95回全国高校野球の決勝戦も終わった。結果は、前橋育英(群馬)と延岡学園(宮崎)が取りくんだが、一点ちがいで前橋育英が勝った。

テレビで観ていた私は、前橋育英の荒井監督が言われた言葉「積み重ねてきたものを表現できて最終的に優勝できた」の「表現」にとくに感動した。あんなに勝負に厳しいときに、も文学があるのかと思った。——勝っても負けても、心が体を動かしてゆくのか？

テレビからではあるが、熱戦している人も応援している人も、その少年少女の姿の純粹さは何と美しいものであろうか。今、この感動のまま、子規の小説「我が病」について書いてゆきたい。

子規の小説「我が病」―第一回～四回)

いつものように、「子規全集・第十三巻小説紀行・講談社」本を読解してゆく。先ずその中の解題(頁733)、蒲池文雄氏に因る「我が病」について書いてみると、「アルス版や改造社版の両全集(いずれも第十巻)ともにその編集後記で『今子規庵に原稿を存せぬが』と記すのみで、その本文の掘るところを示していない。しかし、それは『子規遺稿第三篇子規小説集』所収の本文以外ではないはずである。本全集もこれを底本とした。」とある。

また、アルス版全集の編輯後記には、「明治33年4月6日『日本』掲載の『週間記事』中の3月29日(「我が病」を草す)

とあり、

どもし火のもとに長びみ書き居れば驚鳴きぬ夜や明けぬらん

の歌もあり、これを引いて証として従うべきである。」と述べている。

第一回。主人公はどんな処に住んでいたのか。

・右には箕輪の人家が田圃越に見えている。

・千住あたりの煙突が二つ三つ真黒な煙を真上に向けて吐いている。

・右手は谷中の森のはずれに天王寺の塔と銀杏の樹と同じ高さに並んでいる処から一直線に北に向って王子の方へ走っている岡の景色が何となく気に入った景色だ。

・正面には三河島村の木立がむらむらと立っている。

・帯のような白雲は千住の煙突の尖と三河島の木立の梢とを連ねて更に天王寺の塔の尖まで続かんとして少しその前に断れている。

・稲の穂はようよう重とうなって道端には野菊や蓼が咲き重なっている。

・露草が小川の水際に茂っていて一枝の花が水に浸されてよごれているのも面白い。

・此の広闊な眺望に見とれて日頃の憂鬱は全く忘れてしまったようである。

・主人公は毎日のように此処へ来ていつも変らぬ景色を見たのであるがそれは今日は殊に愉快に感ぜられる。(次回へつづく)

この風景描写は原文に添って書いた。

ことのはスケッチ (418) 今泉 由利

『グレート・ジャーニー』 ④

○バナマ運河も見せなくては！日本から船に乗ってアルゼンチンへ行く時立寄ったバナマを歩いていた時、大きなトカゲ？小さな恐竜？。こんな子供達に見せたかった。コスタリカ、ニカラグア、グアテマラ、メキシコ；そしてマリアミ。

○イタリア、ミラノからスイス、フランス；地中海に面した道をドライブし、スペイン、ポルトガルの最先端ロカ岬まで。国々、国境宿る、食する；全部伝えたつもりだったけれど、子供達は、ずっと車の後部座席で眠ってばかりいた。私と同じ日本語をつかうように、アルゼンチン生れの子供達の中学の三年間を日本に留学？。日本在のインターナショナル・スクールに通わせなければ、ここで本当の日本人にも育った。

○高校三年間は、カリフォルニアに英語留学。車に乗らないと何も出来ない所で、子供達の留学サポーターに私のフリーウェイ走行距離は月にもゆける、三十八万キロになっっていた。その後、フランス語のためスイスに留学。後は、子供達が自分で自分の場所を選んだ。

○あまりに可哀想で、記憶を消してしまいたいと思うけれど。目指し、努力したから、書き残す。「アルゼンチンで生まれたから、アルゼンチンを代表してオリンピックにゆく。」と決めた。しっかり努力ししっかり実行した。全ての手続きを終え、選手村で過していた時、「アルゼンチンの書類が不備であるゆえ、競技に出られない」と知らされた。

今でも、気が狂いそうに、子供達にごめんなさい、と思いつづけている。

○アマゾン河筏下りを終えた植村直己さんがアルゼンチンの私の家に来て下さっていた。アマゾン河での困難と孤独と恐怖と；それにうち勝つ知能、工夫、勇気、やさしさ；深い瞳。この人に出逢えたことも、失くしたことも、まだ理解できていない。

後に、彼が下ったアマゾン河を見に行つた。理解出来ない大河だった。源流から河口までなんて、そんなことをしてしまった人、出来てしまった人。

アコンカグワや南極や；そんなすごい冒険への思いを私にも分けて下さった。

○アルゼンチン・モレノ氷河へは、セリーナさんと出掛けた。「温暖化で無くなってしまうかもしれない。」「スケッチをしよう」。

史上最大級百トンもあるアルゼンチンノサウルスなど化石がいっぱい埋まっているだろう大地の上を飛んで、南極の方向。鋭くとがる山々のふもと。アルゼンチン湖。

氷河に近付き、舟でうんと近付き、氷河が崩れる波にゆれ。漆黒の闇から氷河が崩れ落ちる今まで聞いたことがなかった音を幾夜も聞いて過ごした。

○ブラジルでの仕事に、アルゼンチンから飛行機に乗ると、イグワスの滝の上を通る。途中下車（？）して、何度も滝に近付いた。とにかく凄い。びしょ濡れになって虹の中にいた。

満月の夜、雲になった水飛沫みずしぼに、月の光が虹をつくる。夜の虹のもとにも居合わせた。

つづく

編集室だより【二〇一三年 八月】

○白金台の自然教育園へ。一ヶ月後の「ウバユリ」と、蒲の穂のの様子を見にゆく。変化していた。

○根岸病院より「NEGISHI HOSPITAL Established 1879」をお贈りいただいた。根岸病院と正岡子規の接点。森田療法「あるがまま」「人のこころを大切に」した精神科医療のこと。今泉忠男の19925制作の油絵「根岸病院の秋」も載せていただいている。幼ない頃聞いた父の話がよみかえる。ありがとうございます。

○立合川、旧東海道、創業安政三年吉田屋のそば会席に招いていただいた。美しく、美味しく、忘れられない。

○神楽坂名物の鳥取砂丘らつきよう「毘沙門漬」をいただく。カリカリとたまらないおいしさ。

○「下原のスイカ」を戴く。丸ごとの大きなスイカ。まず絵を描く。おすそ分けせず5日間かけ食べ尽くした。

○熱海のケアハウスにボランティアにゆく。道中お盆休みとのこと、荷物だらけの人人人、子供子供。歩く場のないほどの混雑。世の中、こんなになっていた。

○東京都立美術館、第六十一回、平和美術展へ。間仲久子氏が出展しておられる。世界を感じる作品に見入った。

○八月のプラネタリウムは「タイタン」。土星の第六衛星。窒素97%、メタン2%の星。タイタンには、液体メタンの雨が降り、メタンやエタンの川や湖が存在するという。

○「おくてん」のための絵を荷造りする。近所の額縁屋さんに搬入を頼み、絵と一緒に私も奥多摩まで運んで下さるよ

う交渉する。引き受けていただいた。

○奥多摩の大橋望彦氏の木工工房「悦鹿」に、コラボ出展させていただく。飾り付け、ライト付け、掃除。夜近所の「奥多摩の木、漆の器」の白井建治さんが来られて、酒盛り。今の世の、何から何まで(?) 話しをした。楽しい夜だった。大橋邸に泊めていただく。

○奥多摩町町長、教育長臨席のもと、「おくてん」オープニングセレモニー。多くの方々のサポートを受け、この会は発展してゆくだろう。

○浜松市秋野不矩美術館、「秋野不矩・インドの風」九月十三日・十月十四日・十月十八日・十一月17日招待券をいただく。

○「東京農大オープンカレッジ」

絹を作る生物は。地球上にはどの地域にどんな種類の繭があるか。風合はどうか。機能性の違いはあるか。非繊維利用(食品、人工軟骨等)。遺伝子組替えなどによってどの方向に発展するか。

ワイルドシルク協議会、今泉雅勝までおたずね下さい。

TEL&FAX 03-6904-12560

E-mail: info@akasaka-tvevjp

○湯河原・清光園旧井上薫別邸の宿

幕末から明治にかけ活躍した井上薫によって建てられた。欧米の建物の意匠性を取り入れ築百年を超える。和洋折衷の宿。

〒413-0001 静岡県熱海市泉26-7

TEL&FAX 0465-162-2038

<http://seikouen-yuga.wara.com>

和菓子街道 (84)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

伊勢街道(7)

前回、白子にある大徳屋長久という老舗和菓子屋の「小原木(おはらぎ)」という菓子を紹介したが、江戸中期に生まれたこの菓子は、すぐに白子名物の地位を獲得。小さな町ながら、伊勢街道沿いのほとんどの菓子屋で同様の菓子を作っている。

幕末の文久年間(1861～1863)に創業、現当主で四代目という久住屋もそんな店の一軒。こちらも、大徳屋同様、元は廻船問屋だったという。久住屋のおはらぎは、「大はら木」という字を当てているが、小麦粉生地を半月に折り、餡を挟んだ姿は同じ。

おはらぎを作る店は数軒あるが、どこもそれぞれの特徴があって、地元の人達は好みや気分でお店を使い分けているようだ。回船業で栄え



手焼きの皮は香ばしく、餡の沁みた中心部はしっとり

た白子の町並みを散策しつつ、江戸時代からの名物のおはらぎを食べ比べをするのも一興だ。

ちなみに私の中では、皮にしっとり餡が染みているこの久住屋の大はら木はなかなか高得点なのである。

◆久住屋菓舗本店

住所：三重県鈴鹿市江島本町7-13

電話：059-386-0142

お知らせ

▽十一月号の原稿は、十月一日(火)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返送用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

△酷暑、猛暑と言われた暑い(この夏も八月が過ぎ去り、九月となりました。

庭の木々で、鳴き声を響かせていた蝉の声も今はなく、何となく哀調をおびた法師蝉の鳴き声も、なぜかまだ聞かれません。それでも、朝の道端の草の露、夜の虫の音に少しずつ秋を感じられるようになりました。

まだまだ続く暑さに、作歌意欲も失せがちになる日々ですが、気持ちを引きしめ、作歌に励みたいものです。

▽九月号の発送は、印刷所のお盆休みによ、通常より一週間遅くれました。

(山口)

三河アラギ規定

◇「三河アラギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アラギ」会員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アラギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月日より、半ヶ年分一万円、一ヶ年分二万円の割で前納された。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一ヶ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができます。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十五年九月二十五日印刷 第六十巻 第十号
平成二十五年十月一日発行 定価 六百元

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘

平松 裕子・山口 千恵子

発行人

今泉 由利

発行所

三河アラギ会
〒一四一〇〇二二

東京都北区王子本町一の二六の六A

T E L (〇三)五九二四一〇六五

振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九

URL

E-mail yur188@cronos.oon.ne.jp
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

印刷所

株式会社 核 創 美